寺田寅彦
森田草平
鈴木三重吉

集

現代日本文學全集 22

寺田寅彦
森田草平
鈴木三重吉
集

現代日本文學全集

22

筑摩書房版

現代日本文學全集 22

寺田寅彦
森田草平
鈴木三重吉 集

昭和三十年七月二十日 印刷
昭和三十年七月二十五日 發行

著者
寺田寅彦
森田草平
鈴木三重吉

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者 古田晁
東京都新宿區改代町二三
印刷者 多田基
東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所 筑摩書房
電話 (29) 七六五一 (代表) —四番
振替 東京 一六五七六八

製版 株式會社精興社
印刷 多田印刷株式會社
製本 矢島製本所

寺田寅彦集　目次

團栗……七
龍舌蘭……九
花物語……一二

〔藪柑子集〕

電車と風呂……一八
丸善と三越……二〇
自畫像……二九
小さな出來事……三八
蜂が團子をこしらへる話……四七
鼠と猫……四九
案内者……五八
蓄音機……六三

〔冬彦集〕

備忘錄……七〇
讀書の今昔……八〇
「手首」の問題……八七

〔續冬彦集〕

俳諧の本質的概論……九一
映畫藝術の特異性……九九
映畫と連句……一〇一
映畫と國民性……一〇一
夏目漱石先生の追憶……一〇三
鉛をかじる蟲……一〇八
耳と目……一一〇

〔蒸發皿〕

北氷洋の氷の破れる音……一一三
科學者とあたま……一一四

〔物質と言葉〕

ピタゴラスと豆……二一七
地圖を眺めて……二一八
〔觸媒〕
天災と國防……二二二
俳句の型式と其進化……二二六
西鶴と科學……二二八

森田草平集　目次

煤煙……二四三

鈴木三重吉集　目次

千鳥……二六九
山彦……二八二
おみつさん……二九五
黒髪……三〇二
物賣りの聲……二二二
〔螢光板〕
子規の追憶……二二七
絲車……二三八
〔橡の實〕
信長の死……二四八
金魚……三〇五
桑の實……三〇八
ぽっぽのお手帳……三六三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

白い鳥……三六七
ざんげ……三七三
寺田寅彦論（辰野隆）……三九五
森田草平の位置と作風（片岡良一）……四〇三
鈴木三重吉（小宮豊隆）……四一三
黒い小猫……三八〇
少年驛傳夫……三八六
解説……四二一
年譜……四二八

裝幀　恩地孝四郎

寺田寅彦集

團栗

もう何年前になるか思ひ出せぬが日は覺えて居る。暮もおし詰つた廿六日の晩、妻は下女を連れて下谷摩利支天の緣日へ出掛けた。十時過に歸つて來て、袂からおみやげの金鍔と燒栗を出して余のノートを讀んで居る机の隅へそつとのせて、便所へはひつたがやがて出て來て蒼い顏をして机の側へ坐ると同時に急に咳をして血を吐いた。驚いたのは當人ばかりではない、其時余の顏に全く血の氣が無くなつたのを見て、一層氣を落したと此れはあとで話した。

翌る日下女が藥取りから歸ると急に暇をくれと云ひ出した。此邊は物騷で、御使に出ると屹度いやな惡戲をされますので、どうも恐ろしくて不氣味で勤まりませぬと妙な事を云ふ。しかし見る通りの病人をかゝへて今急におまへに歸られては途方にくれる。せめて代りの人のある迄辛抱してくれと、よしやまだ一介の書生にしろ、兎に角一家の主人が泣かぬばかりに賴んだので、其日はどうやら思ひ止つたらしかつたが、翌日は國許の親が大病とか云ふ譯でとう〳〵歸つてしまふ。掛取に來た車屋の婆さんに賴んで、何でもよいからと桂庵から連れて來てもらつたのが美代と云ふ女であつた。仕合せと此れが氣立のやさしい正直ものでで、尤も少しぼんやりして居て、狸は人に化けるものだといふやうな事を信じて居たが、兎に角忠實に病人の看護もし、叱られても腹も立てず、そして時にしくじりもやつた。手水鉢を座敷の眞中で取落して洪水を起したり、火燵のお下りを入れて寢て蒲團から疊まで徑一尺程の燒穴をこしらへた事もあつた。それにもかゝはらず余は今に到る迄此美代に對する感謝の念は薄らがぬ。

病人の容體は善いとも惡いともつかぬうちに歳は容捨なく暮れてしまふ。新年を迎へる用意もしなければならぬが、何を買つてどうするものやらわからぬ。それでも美代が病人の指圖を聞いて其れに自分の意見を交ぜて一日忙しさうに働いて居た。大晦日の夜の十二時過、障子のあんまりひどく破れて居るのに氣が付いて、外套の頭巾をひつかぶり、皿一枚をさげて森川町へ五厘の糊を買ひに行つたりした。美代は此夜三時過迄結び蒟蒻をこしらへて居た。

世間は目出度いお正月になつて、暖い天氣が續く。病人も少しづゝよくなる。風の無い日は緣側の日向へ出て來て、紙の折鶴をいくつとなくこしらへて見たり、祕藏の人形の着物を縫うてやつたり、曇つた寒い日は床の中で「黑髮」を彈く位になつた。そして時々心細い愚痴つぽい事を云つては余と美代を困らせる。妻は其頃もう身重になつて居たので、この五月には初產と云ふ女の大難をひかへて居る。おまけに十九の大厄だと云ふ。美代が宿入りの夜など、木枯の音にまじる隣室の淋しい寢息を聞きながら机の前に坐つて、ラムプを見つめたまゝ、長い息をすることもあつた。妻は醫者の間に合ひの氣休めをすつかり信じて、全く一時的な氣管の出血であつたと思つて居たらしい。さうでないと信じたくなかつたのであらう。それでも何處にか不安な念が潛んで居ると見えて、時々「ほんとうの肺病だつて、なほらないと極つた事はないのでせうね」とこんな事をきいた事もある。又或時は「あなた、かくして居るでせう、屹度さうだ、あなたさうでせう」とうるさく聞きながら、余の顏色を讀まうとする、其祈るやうな氣遣はしげな眼づかひを見るのが苦しいから「馬鹿な、そんな事はないと云つたらない」と邪慳な返事で打消してやる。それでも一時は滿足する事が出來たやうであつた。

病氣は少しづゝよい。二月の初には風呂にも入る、髮も結ふやうになつた。車屋の婆さんなどは「もうスッカリ御全快ださうで」と、獨りできめてしまつて、そつと懷から勘定書を出して「どうも大變に、お早く御全快で」と云ふ。醫者の所へ行つて聞くと、善いとも惡いとも云はず、「なにしろ丁度御姙娠中ですからね、此五月が餘程御大事ですよ」と心細い事を云ふ。

それにも拘らず少しづゝよい。月の十何日、風のない暖い日、醫者の許可を得たから植物園へ連れて行つてやると云ふと大變に喜んだ。出

掛けるとなつて庭へ下りると、髪があんまりひどいから一寸撫で付ける迄待つて頂戴と云ふ。懐手をして縁へ腰掛けて淋しい小庭を見廻はす。去年の枯菊が引かれた儘で、あはれに朽ちて居る、それに千代紙の切れか何かが引掛つて風のないのに、寒さうに顫へて居る。手水鉢の向ひの梅の枝に二輪ばかり滿開したのがある。近付いてよく見ると作り花がくつつけてあつた。大方病人のいたづららしい。茶の間の障子のガラス越しに覗いて見ると、妻は鏡臺の前へ坐つて解かした髪を握つてばらりと下げ、櫛をつかつて居る。一寸撫でつけるのかと思つたら自分で新たに卷き直すと見える。よせばよいのに、早くしないかと急き立てておいて、座敷の方へ戻つて、横になつて今朝見た新聞をのぞく。早くしないかと大聲で促す。そんなに急き立てると、なほ出來やしないわと云ふ。黙つて臺所の横をまはつて門へ出て見た。往來の人がじろ〳〵見て通るから仕方なしに歩き出す。半町ばかりぶらぶら歩いて振り返つても未だ出て來ぬから、又引返してもと來た通り臺所の横から縁側へまはつて覗いて見ると、妻が年甲斐もなく泣き伏して居るのを美代がなだめて居る。あんまりだと云ふ。一人で何處へでもいらつしやいと云ふ。まあ兎も角もと美代がすかしなだめて、やつと出掛ける事になる。實に好い天氣だ。「人間の心が蒸發して霞になりさうな日だね」と云つたら、一間ばかり後を雪駄を引きずりながら、大儀さうについて來た妻は、エヽと氣の無い返事をして無理に笑顔をこしらへる。此時始めて氣が付いたが、成程腹の帶の所が人並より大分大きい。あるき方が餘程變だ。それでも當人は平氣でくつついて來る。美代と二人でよこせばよかつたと思ひながら、無言で歩調を早める。植物園の門をはひつて眞直ぐに廣い園に一杯上つて左に折れる。穏かな日光が廣い園に一杯になつて、花も綠もない地盤はさながら眠つたやうである。溫室の白塗りがキラ〳〵するやうで其前に二三人懐手をして窓から中を覗く人影が見えるばかり、噴水も出て居ぬ。睡蓮もまだつめたい泥の底に眞夏の雲の影を待つて居る。溫室の中からガタ〳〵と下駄の音を立てて、田舍の婆さん達が四五人、狐につまゝれた樣な顔をして出て來る。余等は之と入れちがつてはひる。活力の充ちた、しめつぽい熱帶の空氣が鼻の孔から腦を襲ふ。椰子の樹や琉球の芭蕉などが、今少し延びたら、此屋根をどうする積りだらうといつも思ふのであるが、今日もさう思ふ。瓜哇と云ふ國には肺病が皆無だと誰れかの云つた事を思ひ出す。妻は濃綠に朱の斑點の入つた草の葉をいぢつて居るから「オイ止せ、毒かも知れない」と云つたら、慌てて放して、いやな顔をして指先を見つめて一寸嗅いで見る。左右の廻廊には處々赤い花が咲いて、其中からのんきさうな人の顔もあちこちに見える。妻はなんだか氣分が悪くなつたと云ふ。顔色は大して悪くもない。急に生溫い處へはひつた爲めだらう。早く外へ出た方がよい、おれはも少し見て行くからと云つたら、一寸ためらつたが、おとなしく出て行つた。紅い花だけ見てすぐ出る積りで居たら、人と人との間へはさまつて、ちよつと出損なつて、やつと出て見ると妻は其處には居ぬ。何處へ行つたかと見廻はすと、遥か向ふの東屋のベンチへ力無ささうに凭れたまゝ、こつちを見て笑つて居た。

園の靜けさは前に變らぬ。日光の目に見えぬ力で地上の凡ての活動をそつと抑へ付けてある樣に見える。氣分はすつかりよくなつたと云ふから、もうそろ〳〵歸らうかと云ふと、少し驚いたやうに余の顔を見つめて居たが、折角來たから、もう少し、池の方へでも行つてみませうと云ふ。それもさうだと其方へ向く。

崖を下りかゝると下から大學生が二三人、黄色い聲でアリストートルがどうしたとか云ふやうな事を議論しながら上つて來る。池の小島の東屋に、三十位の眼鏡をかけた品の好い細君が、海軍服の男の兒と小さい女の兒を遊ばせて居る。海軍服は小石を拾つては氷の上をすべらせて快い音を立てて居る。ベンチの上には皺くちやの半紙が擴げられて、其上にカステラの大きな片がのつて居る。「あんな女の兒が欲しいわねえ」と妻がいつにない事を云ふ。

出口の方へと崖の下をあるく。何の見るものもない。後で妻が「おや、團栗が」と不意に大きな聲をして、道脇の落葉の中へはひつて行く。なる程、落葉に交つて無數の團栗が、凍てた崖下の土にころがつて居る。妻は其處へしやがん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

で熱心に拾ひはじめる。見る間に左の掌に一杯になる。余も一つ二つ拾つて向ふの便所の屋根へ投げると、カラ〳〵と轉がつて向側へ落ちる。妻は帶の間からハンケチを取出して膝の上へ擴げ、熱心に拾ひ集める。「もう大概にしないか、馬鹿だな」と云つて見たが、中々止めさうもないから便所へ入る。出て見るとまだ拾つて居る。「一體そんなに拾つて、どうしようと云ふのだ」と聞くと、面白さうに笑ひながら、「だつて拾ふのが面白いぢやありませんか」と云ふ。ハンケチに一杯拾つて包んで大事さうに縛つて居るから、もう止すかと思ふと、今度は「あなたのハンケチも貸して頂戴」と云ふ。とう〳〵余のハンケチにも何合かの團栗を充たして「もう止してよ、歸りませう」と何處迄もいゝ氣な事をいふ。

團栗を拾つて喜んだ妻も今はない。御墓の土には苔の花が何遍か咲いた。山には團栗も落ちれば、鵯の啼く音に落葉が降る。今年の二月、あけて六つになる忘れ形身のみつ坊をつれて、此植物園へ遊びに來て、昔ながらの團栗を拾はせた。こんな些細な事に迄、遺傳と云ふやうなものがあるものだか、みつ坊は非常に面白がつた。五つ六つ拾ふ毎に、息をはずませて余の側へ飛んで來て、余の帽子の中へひろげたハンケチへ投げ込む。段々得物の增して行くのをのぞき込んで、頰を赤くして嬉しさうな溶けさうな顏をする。爭はれぬ母の面影が此無邪氣な顏の何處かの隅からチラリとのぞいて、うすれかゝつた昔の記憶を呼び返す。「おとうさん、大きな團栗、こいも〳〵〳〵〳〵〳〵みんな大きな團栗」と小さい泥だらけの指先で帽子の中に累累とした團栗の頭を一つ一つ突つつく。「大きい團栗、ちいちやい團栗、みいんな利口な團栗ちやん」と出たらめの唱歌のやうなものを歌つて飛び〳〵しながら又拾ひ始める。余は其罪のない横顏をじつと見入つて、亡妻のあらゆる短所と長所、團栗のすきな事も折鶴の上手な事も、なんにも遺傳して差支へはないが、始めと終りの悲慘であつた母の運命だけは、此兒に繰返させ度くないものだと、しみ〴〵さう思つたのである。

（明治三十八年四月、ホトトギス）

龍舌蘭

一日じめ〳〵と、人の心を腐らせた霧雨もやんだやうで、靜かな宵闇の重く濕つた空に、何處かの汽笛が長い波線を引く。さつき迄「青葉茂れる櫻井の」と繰返して居た隣のオルガンが止むと、間もなく門の鈴が鳴つて軒の葉櫻の雫が風のないのにばら〳〵と落ちる。「初雷樣だ、あすはお天氣だよ」と勝手の方で婆さんが獨り言を云ふ。地の底空の果から聞えて來る樣な重重しい響が腹にこたへて、晝間讀んだ悲慘な小說や、隣の「青葉しげれる櫻井の」やらが、今更に胸をかき亂す。こんな時には何時もするやうに、机の上に肱を突いて、頭をおさへて、何もない壁を見詰めて、あつた昔、ない先きの夢幻の影を追ふ。何だか思ひ出さうとしても、思ひ出せぬ事があつてうつとりして居ると、雷の音が今度は稍近く聞えて、ふつと思ひ出すと共に、あり〳〵目の前に浮んだのは、雨に濡れた龍舌蘭の鉢である。

河野の義さんが生れた歲だから、もう彼是十四五年の昔になる。自分もまだやつと十か十三位であつたらう。來る幾日義雄の初節句の祝をしますから皆さん御出下さるやうにとチョン髷の兼作爺が案內に來て、其時に貰つた紅白の餅が大きかつた事も覺えて居る。いよ〳〵其日となつて、母上と自分と二人で、車で出掛けた。折柄の雨で車の中は窮屈であつた。自分の住つて居る町から一里半餘、石ころの田舍道をゆられながらやつと姉さんの宅へ着いた。門の小流の菖蒲も雨にしをれて居る。もう大勢客が來て居て母上は一人々々に懇に一別以來の辭儀をせられる。自分は其後に小さくなつて手持無沙汰で居ると、折よくこゝの俊ちやんが出て來て、待ち兼ねて居たと云ふ風で自分を引張つて御池の鯉を見に行つた。姉さん處には池があつて好いと子供心に羨しく思うて居た。池は一寸した中庭に一杯になつて居て、門の小川の水が表か

ら床下をくゞつて此池へ通ひ裏田圃へぬける樣にしてある。大きな鯉、緋鯉が澤山飼つてあつて、此頃の五月雨に增した濁り水に、おとなしく泳いで居ると思ふと折々凄まじい音を立ててはね上る。池の圍りは岩組になつて、瘦せた卷柏、櫻櫚竹抔が少しあるばかり、そして隅の扁たい岩の上に大きな龍舌蘭の鉢が乘つて居る。姉さんが此家へ輿入になつた時、始めてこの鉢を見て珍しい草だと思つたが、今でも故鄕の姉を思ふ度には屹度此池の龍舌蘭を思ひ出す。今思ひ出したのは此鉢であつた。

池を距てて池の間と名の付いた此小座敷の向ひ側は、臺所に續く物置の板蔀の、其上が一寸しやれた中二階になつて居る。

あの頃の田舍の初節句の祝宴は大抵二日續いたもので、親類緣者は勿論、平素は餘り往來せぬ遠緣のいとこ、はとこ迄、中には隨分遠くからはる〳〵泊りがけで出て來る。それから近村の小作人、出入の職人まで寄り集つて盛んな祝であつた。近親の婦人が總出で杯盤の世話をし、酌をする。その上、町から藝者を迎へて興を添へさせるのが例なので、此時も二人來て居た。これも祝のある內は泊つて居るので、池の向ふの中二階は此藝者の化粧部屋にも休憩所にも又寢室にもなつて居た。

夕方近くから夜中過ぎる迄、家中唯眼のまはる程忙しい騷がしい。臺所では皿鉢のふれ合ふ音、庖丁の音、料理人や下女等の無作法な話聲などで一通り騷がしい上に、猫、犬、それから雨に降り込められて土間へ集つて居る鷄迄が一層の賑かさを添へる。奥の間、表座敷、玄關とも云はず、一杯の人で、それが一人々々に御辭儀をしては六ケしい挨拶を交換して居る。

其混雜の間をくゞり、御辭儀の頭の上を踏み越さぬばかりに杯盤酒肴を座敷へはこぶ往來も見るからに忙しい。子供等は仲間が大勢出來た嬉しさで威勢よく騙け廻る。一體自分は其頃から陰氣な性で、こんな騷ぎが面白くないから、いつもの樣に宵の內いゝ加減御馳走を食つてしまふと奥の藏の間へ行つて戸棚から八犬傳、三國誌などを引つぱり出し、おなじみの信乃や道節、孔明や關羽に親しむ。此室は女の衣裳を着更へる處になつて居たので、四面にずらりと衣桁を並べ、衣紋竹を掛けつらねて、派手なやら、地味なやらいろんな着物が、蟲干の時の樣に並んで居る。白粉臭い、汗くさい變な香が籠つた中で、自分は信乃が濱路の幽靈と語るくだりを讀んだ。夜の更けるにつれて、座敷の方は段々賑かになる。調子を合す三味線の音がすると、淸らかな女の聲で唄ふのが手に取る樣に聞える。調子はづれの鄙歌が一度に起つて皿をたゝく音もする。一しきり唄が止んだと思ふと、不意に鞭聲蕭々と誰やらがいやな聲でわめく。

信乃が腕を拱いてうつむいて居る前に片手を疊につき、片袖をくはへて居る濱路の後に、影の樣に現はれた幽靈の繪を見て居た時、自分の後の唐紙がする〳〵と開いて、はひつて來た人がある。見ると年增の方の藝者であつた。自分にはかまはず片隅の衣桁に懸つて居る着物の袂をさぐつて何か帶の間へはさんで居たが、不意に自分の方をふり向いて「あちらへいらつしやいね、坊ちやん」と云つた。そして自分の傍へ膝のふれる程に坐つて「オ、いやだ、御化け」と繪をのぞく。髮の油が匂ふ。二人でだまつて無心に此繪を見て居たら誰れかが「淸香さん」とあつちの方で呼ぶ。藝者はだまつて立つて部屋を出て行つた。

俊ちやんと二人で奥の間で寢てしまつた頃も、座敷の方はまだ宵のさまであつた。

翌る日も朝から雨であつた。昨夜の騷ぎにひきかへて靜か過ぎる程靜かであつた。男は表の座敷、女同士は奥の一間へ集つて、しめやかに話して居る。母上は姉さんと押入から子供の着物など引きちらして何か相談して居る。新聞を擴げた上に居眠りを始めて居る人もある。酒の匂の籠つた重くるしい鬱陶しい空氣が家の中に充ちて、誰れも彼れも、とんと氣拔のした樣な風である。臺所では折々トン、コトンと魚の骨でも打つらしい單調な響が靜かな家中にひゞいて、それが又一種の眠氣をさそふ。中二階の方で、つま引の三絃の音がして「夜の雨もしや來るかと」とつやのある低い聲で唄ふ。それもぢき止んで五月雨の軒の玉水が亜鉛のとゆに咽んで居る。骨を打つ音は思ひ出した樣に臺所にひびく。

晝から俊ちやんなどと、ぢき隣の新宅へ遊びに行つた。內の人は皆姉さんの方へ手傳に行つ

て居るので、唯中氣で手足の利かぬ祖父さんと雇婆さんが居るばかり、いつもは賑かな家もひつそりして、床の間の金太郎や鍾馗も淋しげに見えた。十六むさし、將棋の駒の當てつこなどして見たが氣が乘らぬ。緣側に出て見ると小庭を圍ふ低い土塀を越して一面の青田が見える。雨は煙の樣で、遠くもない八幡の森や衣笠山もぼんやりにじんだ墨繪の中に、薄く萌黄をぼかした稻田には、草取る人の簑笠が黄色い點を打つて居る。ゆるい調子の、眠さうな草取歌が聞える。歌の詞は聞き取れぬが、單調な悲しげな節で消え入るやうに長く引いて、一ふしが終ると、しばらく默つて又ゆるやかに歌ひ出す、此れを聞いて居ると何だか胸をおさへられるやうで急に姉さんの宅へ歸りたくなつたから一人で歸つた。歸つて見ると、もうそろ〳〵客が來始めて、例のうるさい御辭儀が始つて居る。さつきから頭が重いやうで、氣が落付かぬ樣で人に話しかけられるのがいやであつたから、獨りで藏の間へ入つて八犬傳を見たが、すぐいやになる。鯉でも見ようと思つて池の間へ行つて見た。緣側の柱へ頭をもたせてぼんやり立つ。水かさのました稻田から流れ込んだ浮草が、ゆるやかに廻りながら、水の面へ雨のしづくが畫いては消し、畫いては消す小さい紋と一緒に流れて行く。鯉は片隅の岩組の陰に仲好く集つたまゝ靜かに鰭を動かして居る。龍舌蘭の厚いとげのある葉が濡れ色に光つて立つて居る。中二階の池に臨んだ丸窓には、昨夜の清香の淋しい顏が見える。窓の緣に頰杖をついたまゝ、何やら物思はしさうに薄墨色の空の彼方を見つめて居る。こめかみに貼つた頭痛膏にかゝる後れ毛を撫でつけながら、自分の方を向いたが、輕くうなづいて片頰で笑つた。

夕方母上は、あんまり內をあけてはと云ふので、姉上の止めるのにかゝはらず歸る事になつた。「お前も歸りませうね」と聞かれた時、歸るのが何だか名殘り惜しい樣な氣もして「ウン」と鼻の中で曖昧な返事をする。姉さんが「此兒はいゝでせう。ねえ、お前もう一晩泊つておいで」とすゝめる。之れにも「ウン」と鼻で返事する。「泊るのはいゝが姉さんに世話をおかけでないよ」と云つていよ〳〵一人で歸る支度をせられる。立場迄迎にやつた車が來たので姉さんと門迄送つて出た。車が柳の番所の辻を曲つて見えなくなつた時急に心細くなつて、一緒に歸ればよかつたと思ふ。「さあ御出で」と姉さんは引立てる樣に內へはひる。

頭の工合がいよ〳〵惡くなつて心細い。母上と一緒に歸ればよかつたと心で繰返す。煙る霧雨の田圃道をゆられて行く幌車の後影を追ふ樣な氣がして、なつかしい我家の門の柳が胸にゆらぐ。騷々しい、殺風景な酒宴に何の心殘りがあつて歸りそこなつたのか。歸りたい、今からでも歸りたいと便所の口の緣へ立つたまゝ南天の枝にかゝつてゐる紙のてる〳〵坊さんに祈るやうに思ふ。雨の日の黄昏は知らぬ間に忍足で軒に迫つて早や灯ともし頃の侘しい時刻になる。家の內は段々賑かになる。はしやいだ笑聲などが頭に響いて侘しさを增すばかりである。

姉上に、少し心持が惡いからと、云ひにくかつたのをやつと云つて早く床を取つてもらつて寢た。萌黄地に肉色で大きく鶴の丸を染め拔いた更紗蒲團が今も心に殘つて居る。頭が冴えて眠られさうもない。天井に吊るした金銀色の蠅除け玉に寫つた小さい自分の寢姿を見て居ると、妙に氣が遠くなる樣で、體が段々落ちて行く樣な何とも知れず心細い氣がする。母上はもうう ちへ歸りついて奧の佛壇の前で何かして居られるかと思ふと譯もなく悲しくなる。姉さんのうちが賑かなのに比べて我家の淋しさが身にしむ。いろんな事を考へて夜着の領を嚙んで居ると、涙が眼じりからこめかみを傳うて枕にしみ入る。座敷では「夜の雨」を唄ふのが聞える。池の龍舌蘭が眼に浮ぶと、清香の顏が見えて片頰で笑ふ。

此夜凄まじい雷が鳴つて雨雲を蹴散らした。朝はすつかり晴れて强い日光が青葉を射て居た。早起して顏を洗つた自分の頭もせい〳〵して、勇ましい心は公園の球投げ、樋川の夜振と駈けめぐつた。

義ちやんは立派に大きくなつたが、龍舌蘭は今はない。

雷はやんだ。あすは天氣らしい。

（明治三十八年六月、ホトトギス）

花物語

一　晝顔

いくつ位の時であつたかたしかには覺えぬが、自分が小さい時の事である。宅の前を流れてゐる濁つた堀川に沿うて半町位上ると川は左に折れて舊城の裾の茂みに分け入る。その城に向うた此方の岸に廣い空地があつた。維新前には藩の調練場であつたのが、其頃は縣廳の所屬になつたまゝで荒地になつてゐた。一面の砂地に雜草が所まだらに生ひ茂り處々晝顔が咲いてゐた。近邊の子供は此處を好い遊び場所にして柵の破れから出入して居たが咎める者もなかつた。夏の夕方は銘々に長い竹竿を肩にして空地へ出かける。何處からともなく澤山の蝙蝠が蚊を喰ひに出て、空を低く飛びかはすのを、竹竿を振うては叩き落すのである。風のない煙つた樣な宵闇に、蝙蝠を呼ぶ聲が對岸の城の石垣に反響して暗い川上に消えて行く。「蝙蝠來い。水呑ましよ。そつちの水にがいぞ」とあちらこちらに聲がして時々竹竿の空を切る力ない音がヒューと鳴つてゐる。賑やかなやうで云ひ知らぬ淋しさが籠つてゐる。蝙蝠の出さかるのは宵の口で、遲くなるに從つて一つ減り二つ減り何處となく消える樣に居なくなつてしまふ。すると子供等も散り〳〵に歸つて行く。後はしんとして死んだ樣な空氣が廣場を鎖してしまふのである。いつか塒に迷うた蝙蝠を追うて荒地の隅迄行つたが、ふと氣が付いて見るとあたりには誰も居ぬ。仲間も歸つたか聲もせぬ。川向ふを見ると城の石垣の上に鬱然と茂つた榎が闇の空に物恐ろしく擴がつて汀の茂みは眞黑に眠つて居る。足をあげると草の露がひやりとする。名狀の出來ぬ暗い恐ろしい感じに襲はれて夢中に駈出して歸つて來た事もあつた。廣場の片隅に高く小砂を盛上げた土堤の樣なものがあつた。自分等は此れを天文臺と名けてゐたが、實は昔の射的場の玉避けの迹であつたので時々砂の中から長い鉛玉を掘り出す事があつた。年上の子供は此の砂山によぢ登つてはすべり落ちる。時々戰爭ごつこもやつた。賊軍が天文臺の上に軍旗を守つて居ると官軍が攻め登る。自分もこの軍勢の中に加はるのであつたが、どうしても此の砂山の頂き迄登る事が出來なかつた。いつもよく自分をいぢめた年上の者等は苦もなく駈け上つて上から弱蟲と嘲る。「早く登つて來い、此處から東京が見えるよ」などと云つて笑つた。口惜しいので懸命に登りかけると、砂は足元から崩れ、力草と賴む晝顔は脆くちぎれてすべりおちる。砂山の上から賊軍が手を打つて笑うた。しかしどうしても登り度いといふ一念は幼い胸に巢をくうた。或時は夢に此の天文臺に登りかけてどうしても登れず、藻掻いて泣き、母に起され蒲團の上に坐つてまだ泣いた事さへあつた。「お前はまだ小さいから登れないが、今に大きくなつたら登れますよ」と母が慰めてくれた。其後自分の一家は國を離れて都へ出た。執着のない子供心には故鄕の事は次第に消えて晝顔の咲く天文臺もたゞ夢のやうな影を留めるばかりであつた。二十年後の今日故鄕へ歸つて見ると此の廣場には町の小學校が立派に立つてゐる。大きくなつたら登れると思つた天文臺の砂山は取り崩されてもう影もない。たゞ昔の儘を留めてなつかしいのは放課後の庭に遊んで居る子供等の勇ましさと、柵の根元にかれ〴〵に咲いた晝顔の花である。

二　月見草

高等學校の寄宿舍にはひつた夏の末の事である。明け易いといふのは寄宿舍の二階に寢て始めて覺えた言葉である。寢相の悪い隣の男に踏みつけられて眼をさますと、時計は四時過ぎたばかりだのに、夜はしら〳〵と半分上げた寢室のガラス窓に明けかゝつて、覺め切らぬ眼には釣り並べた蚊帳の新しいのや古い萌黃色が夢のやうである。窓の下框には扁柏の高い梢が見えて、其上には今眼覺めた樣な裏山が覗いてゐる。床は其儘に、そつと拔け出して運動場へ下りると、廣い芝生は露を浴びて、素足につつかけた

兵隊靴を濡らす。ばつたが驚いて飛出す羽音も快い。芝原の圍りは小松原が取り卷いて、隅の處々には月見草が咲き亂れてゐた。其中を踏み散らして廣い運動場を一圍りする內に、赤い日影が時計臺を染めて賄所の井戸が威勢よく軋り始めるのであつた。其頃或夜自分は妙な夢を見た。丁度運動場のやうで、もつと廣い草原の中を朧な月光を浴びて現ともなく彷徨うて居た。淡い夜霧が草の葉末に下りて四方は薄絹に包まれたやうである。何處ともなく草花のやうな香がするが何の匂とも知れぬ。足許から四方にかけて一面に月見草の花が咲き連なつてゐる。自分と並んで一人若い女が歩いて居るが、世の人と思はれぬ蒼白い顏の輪郭に月の光を受けて默つて歩いて居る。薄鼠色の着物の長く曳いた裾には矢張り月見草が美しく染め出されてゐた。どうしてこんな夢を見たものかそれは今考へても分らぬ。夢が覺めて見るとガラス窓がほのかに白んで、蟲の音が聞えてゐた。寢汗が出て居て胸がしぼる樣な心持であつた。起きるともなく床を離れて運動場へ下りて月見草の咲いてゐる邊を何遍となくあちこちと歩いた。其後も每朝の樣に運動場へ出たが、此れ迄に此處を歩いた時の樣な爽快な心持はしなくなつた。寧ろ非常に淋しい感じばかりして、其頃から自分は次第に吾と吾が身を削る樣な、憂鬱な空想に耽るやうになつてしまつた。自分が不治の病を得たのも此頃の事であつた。

三　栗の花

三年の間下宿して居た吉住の家は黑髮山の麓も稍奧まつた處である。家の後ろは狹い裏庭で、其上はもうすぐに崖になつて大木の茂りが蔽ひ重なつてゐる。傾く年の落葉木實と一緒に鵯の鳴聲も軒端に降らせた。自分の借りてゐた離室から表の門への出入には是非共此裏庭を通らねばならぬ。庭に臨んだ座敷の外れに三疊敷許りの突き出た小室があつて、洒落れた丸窓があつた。此處は宿の娘の居間と極つてゐて、丸窓の障子は夏も閉ぢられてあつた。丁度此部屋の眞上に大きな栗の木があつて、夏初の試驗前の調べが忙がしくなる頃になると、黃色い房紐のやうな花を屋根から庭へ一面に降らせた。落ちた花は朽ち腐れて一種甘いやうな强い香氣が小庭に充ちる。此處等に多い大きな蠅が勢ひのよい羽音を立てて此れに集まつて居る。力强い自然の旺盛な氣が腦を襲ふやうに思はれた。此花の散る窓の內には內氣な娘が垂れ籠めて讀物や針仕事の稽古をして居るのであつた。自分が此家にはじめて來たころはやう〳〵十四五位で桃割に結うた額髮を垂らせてゐた。色の黑い、顏立も美しいといふのではないが眼の涼しい何處か可愛氣な兒であつた。主人夫婦の間には年老つても子が無いので、親類の子供を貰つて育てて居たのである。娘の外に大きな三毛猫が居るばかりで寧ろ淋しい家庭であつた。自分はいつも無口な變人と思はれてゐた位で、宿の者と親しい無駄話をする事も滅多になければ、娘にもやさしい言葉をかけたこともなかつた。每日の食事時には此娘が駒下駄の音をさせて迎へに來る。土地の訛つた言葉で「御飯お上がんなさいまつせ」と云ひ捨ててすた〳〵歸つて行く。初めはほんの子供のやうに思つてゐたが一夏々々歸省して來る每に、何處となく大人びて來るのが自分の眼にもよく見えた。卒業試驗の前の或日、灯ともし頃、復習にも飽きて離室の緣側へ出たら栗の花の香は馴れた身にもしむ樣であつた。主家の前の植込の中に娘が白つぽい着物に赤い帶をしめて猫を抱いて立つて居た。自分の方を見ていつにない顏を赤くしたらしいのが薄暗い中にも自分に分つた。そしてまともに此方を見つめて不思議な笑顏を洩したが、物に追はれでもした樣に座敷の方に駈込んで行つた。其夏を限りに自分は此土地を去つて東京に出たが、翌年の夏初め頃殆ど忘れて居た吉住の家から手紙が屆いた。娘が書いたものらしかつた。年賀の他には便りを聞かせた事もなかつたが、どう思うたものか、細々と彼地の模樣を知らせてよこした。自分の元借りてゐた離室は其後誰も下宿して居ないさうである。東京といふ處は定めて好い處であらう。一生に一度は行つて見たいといふやうな事も書いてあつた。別に何といふ事もないが何處となく艶かしいのは矢張り若い人の筆だからであらう。一番おしまひに栗の花も咲き候。やがて散り申候とあつた。名前は母親

の名が書いてあつた。

四　凌霄花

小學時代に一番嫌ひな學科は算術であつた。いつでも算術の點數が悪いので兩親は心配して中學の先生を頼んで夏休み中先生の宅へ習ひに行く事になつた。宅から先生の所迄は四五町もある。宅の裏門を出て小川に沿うて少し行くと村はづれへ出る、そこから先生の家の高い松が近邊の藁屋根や植込の上に聳えて見える。此れに凌霄花が下から隙間もなく絡んで美しい。毎日晝前に母から注意されていや〳〵ながら出て行く。裏の小川には美しい藻が澄んだ水底にうねりを打つて搖れてゐる。其間を小鮒の群が白い腹を光らせて時々通る。子供等が丸裸の背や胸に泥を塗つては小川へ入つてボチヤ〳〵やつて居る。附木の水車を仕掛けて居るのもあれば、盥船に乘つて流れて行くのもある。自分は羨しい心をおさへて川沿ひの岸の草をむしり乍ら石盤をかかへて先生の家へ急ぐ。寒竹の生籬をめぐらした冠木門をはひると、玄關の脇の坪には蓆を敷き並べた上によく藏を干してあつた。玄關から案内を乞ふと色の黑い奥さんが出て來て「暑いのによう御精が出ますねえ」といつて座敷へ導く。綺麗に掃除の屆いた庭に臨んだ縁側近く、低い机を出してくれる。先生が出て來て、默つて床の間の本棚から算術の例題集を出してくれる。横に長い黄表紙で木版刷の古い本であつた。「甲乙二人の旅人あり、甲は一時間一里を歩み乙は一里半を歩む……」といつた樣な題を讀んで其意味を講義して聞かせて、これをやつて御覽といはれる。先生は縁側へ出て欠伸をしたり勝手の方へ行つて大きな聲で奥さんと話をしたりして居る。自分は其問題を前に置いて石盤の上で石筆をコツ〳〵いはせて考へる。座敷の縁側の軒下に投網が釣り下げてあつて、長押の樣なものに釣竿が澤山掛けてある。何時間で乙の旅人が甲の旅人に追ひ着くかといふ事がどうしても分らぬ、考へて居ると頭が熱くなる、汗が坐つて居る脚ににじみ出て、着物のひつつくのが心持が悪い。頭を抑へて庭を見ると、笠松の高い幹には眞赤な凌霄の花が熟さうに咲いてゐる。よい時分に先生が出て來て「どうだ、六ケしいか、ドレ」といつて自分の前へ坐る。羅紗切れを丸めた石盤拭きで隅から隅まで一度拭いてそろ〳〵丁寧に說明してくれる。時々わかつたかわかつたかと念をおして聞かれるが、大方それがよく分らぬので妙に悲しかつた。俯向いて居ると水洟が自然に垂れかかつて來るのをじつと堪へて居る、いよ〳〵落ちさうになると思切つてすゝり上げる、これもつらかつた。晝飯時が近くなるので、勝手の方では皿鉢の音がしたり、物を燒く匂がしたりする。腹の減るのもつらかつた。繰り返して敎へてくれても、結局あまりよくは分らぬと見ると、先生も悲しさうな聲を少し高くすることがあつた。それが又妙に悲しかつた。「もうよろしい、又明日おいで」と云はれると一日の務が兎も角もすんだやうな氣がして大急ぎで歸つて來た。宅では何も知らぬ母が色々涼しい御馳走をこしらへて待つて居て、汗だらけの顏を冷水で淸め、ちやほやされるのが又妙に悲しかつた。

五　芭蕉の花

晴れ上つて急に暑くなつた。朝から手紙を一通書いたばかりで何をする元氣もない。何遍も机の前へ坐つて見るが、ぢきに苦しくなつてついねそべつてしまふ。時々涼しい風が來て軒のガラスの風鈴が鳴る。床の前には幌蚊帳の中に俊坊が顏を眞赤にして枕を脫してうつむきに寢て居る。縁側へ出て見ると庭はもう半分陰になつて、陰と日向の境を蟻がうろ〳〵して出入して居る。此間上田の家から貰つて來たダーリアはどうしたものか少し芽を出しかけた儘で大きくならぬ。戸袋の前に大きな廣葉を伸した芭蕉の中の一株には今年花が咲いた。大きな厚い花瓣が三つ四つ開いた許りで、とう〳〵開き切らずに朽ちてしまふのか、もう少し萎びかゝつたやうである。蟻が二三匹たかつて居る。俊坊が急に泣き出したから覗いて見ると蚊帳の中に坐つて手足を投げ出して泣いて居る。勝手から妻が飛んでくる。坊は牛乳の罎を、投げ出した膝の上で自分に抱へて乳首から呼吸もつかずごくごく飲む。涙でくしや〳〵になつた眼で兩親の顏を等分に眺めながら飲んで居る。飲んでしま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com